

ラブレー研究動向

岩下 綾（慶應義塾大学専任講師）

2012年にラブレー『ガルガンチュアとパンタグリユエル 5 第五の書』が出版され、パンタグリユエルシリーズ全五巻の宮下志朗による新訳が揃った。渡辺一夫が初めてラブレーの日本語訳を発表して（「ガルガンチュワ（1）」『知性』第2号、河出書房、1939年1月）からすでに約七十年の時を経ている。名訳と謳われ古典的地位を築いた渡辺訳の語彙や文化的背景が、時代とともに若い読者に理解され難くなっている中、こうした状況を刷新する待望の新訳が、最新の研究を反映した形で世に出されたことは、日本のラブレー研究史においてもっとも大きな出来事のひとつだろう。新訳の第一弾『ガルガンチュア』が出版された2005年には、みすず書房「理想の教室」シリーズに荻野アンナによる『ラブレーで元気になる』が加わり、青少年のための入門書も提供された。

二十一世紀におけるラブレー研究の隆盛は、すでに十年前から始まっている。2003年、高橋薫によってリュシアン・フェーヴルの大著が翻訳され、『ラブレーの宗教 十六世紀における不信仰の問題』と題して出版された。これまで長い間、ミハイル・バフチンの著書『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』（川端香男里訳、せりか書房、1973年）が与えたグロテスク・リアリズムの印象が、日本におけるラブレー像を独占していた感があるが、バフチンに先立つ歴史学者による研究書が遂に日本語に翻訳されたのである。巻末には、訳者による本書の精緻な分析と受容史が付され、それは同時に日仏における二十世紀のラブレー研究史を一望できるものとなっている。さらに、2009年にはマイケル・スクリーチによるラブレー論の和訳（『ラブレー 笑いと叡智のルネサンス』、平野隆文訳、白水社）が出版され、二十世紀におけるラブレー研究の三巨頭が日本語でも読めるようになった。

このように近年の日本では、ラブレー研究の発展と同時に、古典的研究やラブレー作品そのものを一般読者へと普及させる動きが加速したが、これは日本に限った現象ではないように思われる。現在ラブレー研究は宗教、医学、言語等、さまざまな論点からなされているが、本報告では言語や文体論周辺の成果を中心に近年の研究動向について概観した後に、一般への普及の動きにも言及

したい。

まず、2006年晩夏に五日間にわたってモンリオールで開かれたラブレー国際学会は、近年でもっとも大きな規模の学会であったと言える。ディアヌ・デロジエ他の指揮により、「Rabelais ou “Les aventures des gens curieux”’, *L’hybridité des récits rabelaisiens*」というテーマのもと、カナダ、フランス、アメリカを中心に、イギリス、スイス、オランダ、スペイン、イスラエルの錚々たるラブレー研究者が一同に会した。ラブレーの時代にジャック・カルティエが辿り着いた「新しい土地」において、多岐にわたるテーマで議論を交えたのだが、殊に近年しばしば目にする十六世紀作品における「hybridité」という研究テーマは、この学会を嚆矢に一気に表面化したように思われる。また、アカデミーに残る当時のフランス文化およびラブレーと自分の作品との関係をユーモアを交えて語った、ケベックの作家アントニーヌ・マイエによる記念講演は印象的であった。論集は目下編集中とのことである。

その後、フランスではアグレガシオンの課題図書として二度にわたってラブレー作品が取り上げられた。2006-2007年度には比較文学の領域で『第三の書』が、2011-2012年度にはフランス文学の領域で『第四の書』が課題図書となり、多くの関連図書が出版された。Atelande社のClefs Concours叢書からは、マリ＝クレール・トミーヌによる『第三の書』の解説 (*Naissance du roman moderne : Rabelais, Tiers Livre ; Cervantès, Don Quichotte ; Sterne, Tristram Shandy*) と、ニコラ・ル・カデとオリヴィエ・アレヴィによる『第四の書』の解説 (*Rabelais, Quart Livre*) が著された。特に後者は、当時の社会背景、ラブレーの伝記的側面に始まり、作品の構造、宗教、言語、先行研究の諸テーマに関して、詳細でありながら非常によくまとまった概説をなしている。さらに、この時期に出版されたミリアム・マラシュ＝グロー、クロード・ラ・シャリテ、ヴィオレーヌ・ジャコモット＝シャラの共著による *Rabelais, aux confins des mondes possibles* は、ライブニッツ以前の可能世界概念を扱っており、マリ＝リュス・ドゥモネが近年継続的に論じてきたテーマに新たな視座を与えている。

2011年11月には、フランコ・ジャコネの企画により、「『第四の書』の言葉と意味」と題した国際学会がローマ・サピエンツァ大学で開催された。参加者はフランス・イタリアを中心とした西ヨーロッパの研究者が大部分だが、アメリカからフランソワ・リゴロが参加し、筆者も末席に名を連ねた。学会は同大学

哲学科のあるミラフィオリ荘、ナヴォナ広場前のローマ・フランス学院と場所を変えて三日間にわたって開催された。特に二日目の午前は、ミレイユ・ユション（パンタグリユエル一行が乗り込む船に名付けられた Thalamege という語とその派生語を鍵とする錬金術的読解を行った）、マリ＝リュス・ドゥモネ (sela という最後から二番目の語にまつわるヘブライ語の言語遊戯を例に、中世諷刺物語とグロテスクの重要性を説いた)、マリ＝マドレーヌ・フラゴナール（作中における植物の表象の凡庸さを人間との類似において論じた）の発表により、豊穡な時間となった。女性研究者たちのダイナミックな論証に感嘆していた聴衆の姿が印象深かった。

その半年後、2012年6月には AIEF の大会の一日がラブレーに充てられ、フランソワ・リゴロの組織により各国のラブレー研究者が集められた。冒頭でミレイユ・ユションによりラブレーの伝記の歴史が述べられた後、カナダ（ディアヌ・デロジエ）、イタリア（パオラ・チファレツリ、フランコ・ジャコネ）、アメリカ（スコット・フランシス）、イギリス（リチャード・クーパー）、日本（筆者）各国におけるラブレーの受容史を概観し、最後にニコラ・ル・カデによって二十世紀のラブレー研究を振り返る発表がなされた。論集は2013年中に刊行される予定である。

一方で、このところ若手研究者が目覚ましい活躍を展開している。上記のスコット・フランシスは2012年にプリンストン大学のフランソワ・リゴロの指導のもとで（« Authorial Personae, Ideal Readers, and Advertising for the Book in Lemaire, Marot and Rabelais »）、ニコラ・ル・カデは2009年にリヨン第二大学のミシェル・クレマンのもとで（« L'Évangélisme fictionnel : les livres rabelaisiens, le *Cymbalum Mundi*, L'*Heptaméron* (1532-1552) »）、博士号を取得している。

パリ第四大学博士課程でタンデムを組むように切磋琢磨していた二人の秀才のうち、ロマン・メニーニが2012年11月に博士号を取得した（« “Græciser en François” — L'Altération de l'intertexte grec (Lucien, Plutarque) dans l'œuvre de Rabelais »）。R・メニーニはルキアノスとプルタルコスを主としたギリシャ語作家がどのようにラブレー作品に取り込まれ改変されていったかを、物語の類型調査と書誌学的調査によって明らかにした。ローマ学会の際にも、ラブレーが所有していたプルタルコスの『モラリア』（バーゼル、1542年）に残された書き込みからラブレーのものを識別し『第四の書』への影響を分析したが、その手

さばきには息を飲む鮮やかさがあつた。もうひとりの秀才オリヴィエ・ペドフルも古典文献およびネオ・ラテンのテキストに精通しており、フィレンツェへの研究滞在、国立古文書学校での古書体学の研修を経て、しばしばペリーヌ・ガランのグループをはじめとしたさまざまな研究グループと協力して学会を組織している。O・ペドフルの博士論文提出が心待ちにされる。

また、2003年にD.E.A.論文(*Rhétorique épistolaire de Rabelais, Québec, Nota bene*)を出版したクロード・ラ・シャリテは、その後、驚異的な勢いで数々の論文執筆、学会発表、学会の組織と企画、および学生の指導を行う傍ら、長年準備してきた著書 *Rabelais philologue et le Pronostic d'Hippocrate* (仮題) を近日 *Classique Garnier* 社から上梓する。出版印刷業者クロード・ヌリーについてのセミナーを共同開催していたウィリアム・ケンプが、1537年にラブレーが出版したヒポクラテスの『予後論』(Lyon, Sébastien Gryphe) をウェルカム・ライブラリー(ロンドン)のカタログに発見した後、C・ラ・シャリテがその真偽を含めて綿密な調査を行った成果をまとめたものである。C・ラ・シャリテは、この版はモンペリエ大学で教鞭をとっていたラブレーが、ラテン語訳ではなくギリシャ語原典にあたるよう学生のために編集したものであると指摘した上で、当時の医学の文献学的側面を描き出すと同時に、ラブレーの物語作者としての性質と医学とを、書簡や人間関係の調査をもとに有機的に結びつけることを試みている。五百年以上前のラブレーの手による版が新たに発見され、学識豊かな研究とともに発表されることは、今後の研究にとって大きな意義と希望がある。

こうした若手ラブレー研究者の活躍は、プレイヤッド叢書ラブレー全集の中心的な編集者となったミレイユ・ユシヨンの尽力によるところが大きい。ラブレーにとっては敵陣の牙城ともいえるソルボンヌの教授でありながらも、派閥や研究領域にとらわれないリベラルな教育と研究グループの運営を行っている。実際、M・ユシヨンのもともとはラブレーに限らず、十六世紀の作家・思想家全般、書誌学、美学等の研究、さらにはそれらを横断する学際的な研究においても、多くの研究者が輩出しており、十六世紀研究の大家たちからも評判が高い。ラブレー学の普及と発展を第一に願って研究・教育活動を続けている姿には、機知と笑いと粘り強さで時代と闘うラブレーの姿が透けて見えるようだ。寛容でありながら学問に対して誠実な師の精神は、巣立っていった弟子たちにも受け継がれている。M・ユシヨンは、四十三年にわたるこうした教育の功績が讃え

られ、2012年にレジオン・ドヌール勲章シュヴァリエを授与された。

M・ユションが一般読者も対象にして上梓したラブレールの伝記 (*Rabelais*, Gallimard, 2011) は、2012年アカデミー・フランセーズ賞を受賞するほどの成功を収めたが、ここ数年は研究だけに留まらず、一般への普及を目的としたラブレール関連作品も世に出されている。2010年には、テレビ用映画 *La très excellente et divertissante histoire de François Rabelais* が制作された。昨年2月に亡くなったクロード・ゲニューベが監修したもので、ラブレールおよび周辺の人物像に対する氏の解釈が見所の一つと言えるだろう。さらに、2012年には *Compagnie Air de Lune* によって『第四の書』を軸にした *Paroles Gelées* が上演された。題が示すエピソード「凍った言葉」をどのように舞台上で表現するのか、といったことが同僚の間で話題になったが、「劇場の中では、言葉の力は、見えるものや理にかなったものの向こう側に」あり、それを再活性化させたい、とする演出家ジャン・ペロリーニの試みは果たして成功したのだろうか。近々確認してくる予定である。

当然ながら他分野の研究や大家による研究も多く発表・出版されているが、煩瑣を恐れて言及は差し控える。近年のラブレール研究動向を特徴づけるひとつの要素として、以上のように、若手研究者の活躍と作品および研究の一般読者への普及促進が挙げられるのではないだろうか。

研究は日々進んでいる。それを反映した、映画や演劇を含めた広義の翻訳が提供されることは、熟年の読者にも若い世代にも嬉しいことである。ラブレール自身が、例えば『第三の書』で一つの命題に対する解釈の多様性を呈示したように、そもそも作品の解釈はひとつではないし、綿密な調査に基づいている限り様々な翻訳があってもよいはずだ。多くの意見が揃って初めて見えてくることも多い。また、一般への普及は広い意味での教育活動といえる。ラブレールのおもしろさ（医者であったラブレール流に言えば「効用」）を伝えることのできる人材を育成するのは、大学人としてのラブレール研究者の大事な仕事のひとつである。渡辺一夫に始まり、後代の研究者諸氏が継承してきた日本のラブレール学の伝統を受け継いでいくためにも、そして国の内外を問わずよりいっそうラブレール研究を推進していくためにも、寛容な教育と継続的な研究が不可欠である。